

隅田川テラス利用者の水辺環境評価に関する研究

－ その1 護岸形態に応じた利用状況に着目して －

Awareness survey of Sumida River Terrace users

-Part 1 Focusing on the usage status according to the revetment form-

○横山将弥¹, 長谷川演恒², 畔柳昭雄³

Masaya Yokoyama¹, Nobutsune hasegawa², Akio Kuroyanagi³

Abstract : In the Sumida River, which flows down the center of Tokyo, various waterside uses such as business and swimming were made during the Edo period, and it played an important role in the formation of Edo culture. After that, industrialization progressed in the suburbs of the Sumida River, and with the inflow of industrial wastewater and the construction of upright revetments, people and watersides were physically separated. The purpose of this paper is to examine future development plans for the Sumida River by clarifying the awareness and evaluation of the Sumida River's river environment for Sumida River terrace users.

1. はじめに

東京都心部を流下する隅田川では、江戸期には商いや遊泳等の多様な水辺利用がなされており、江戸文化形成の重要な役割を担っていた。その後、隅田川近郊においても工業化が進むに伴い、工業廃水の流入や直立護岸の建設がなされ、物理的にも人と水辺が分断されていた。近年、都市部における水辺環境の再評価がなされ、隅田川においてもスーパー堤防を活用した親水性に配慮した整備が進んでいる。

本稿では隅田川テラス利用者を対象に、隅田川の利用状況や水辺河川環境に対する意識・評価を把握することで、スーパー堤防の親水整備としての効果・効用を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

調査概要を Table1 に、アンケート配布地を Figure1 に示す。本調査は、隅田川の水辺利用者を対象に、水辺環境、水辺の危険性と整備要望、生活環境に関するアンケート調査を実施した。アンケートは、隅田川の桜橋から築地周辺までの内、12 エリアを選定し配布した。配布に際しては、無作為抽出法を採用し、回答を得てから3分の間隔を空け、1エリア毎に30部の回収を目標に実施した。この結果、12 エリアのすべてにおいて30部の回収ができ、12 エリアの合計で180部の回収を行うことが出来た。

3. 調査結果

3-1. 利用者の居住地

隅田川テラス利用者の居住地からアンケート配布地までの距離を0.5km圏、1.0km圏、1.5km圏、2.0km圏、

Table1. Survey outline

調査対象地	隅田川テラス
調査方法	隅田川テラス利用者へのアンケート調査（無作為抽出法）
調査期間	2021年8月28日・29日/9月4日・5日 9:00~18:30
回収数	スーパー堤防=180通 直立堤防=180通
利用状況	来訪頻度、来訪方法、時間、滞在時間、行動目的（カテゴリ選択or記入）
水辺環境について	満足度・重要度（カテゴリ選択）
水辺の危険度と整備要望	印象・希望度（カテゴリ選択）
利用者の生活環境	不満項目、解消方法、コロナ禍での来訪特性（カテゴリ選択）
被験者属性	性別、年齢、職業、家族構成、居住年数、居住形態、居住地（カテゴリ選択or記入）

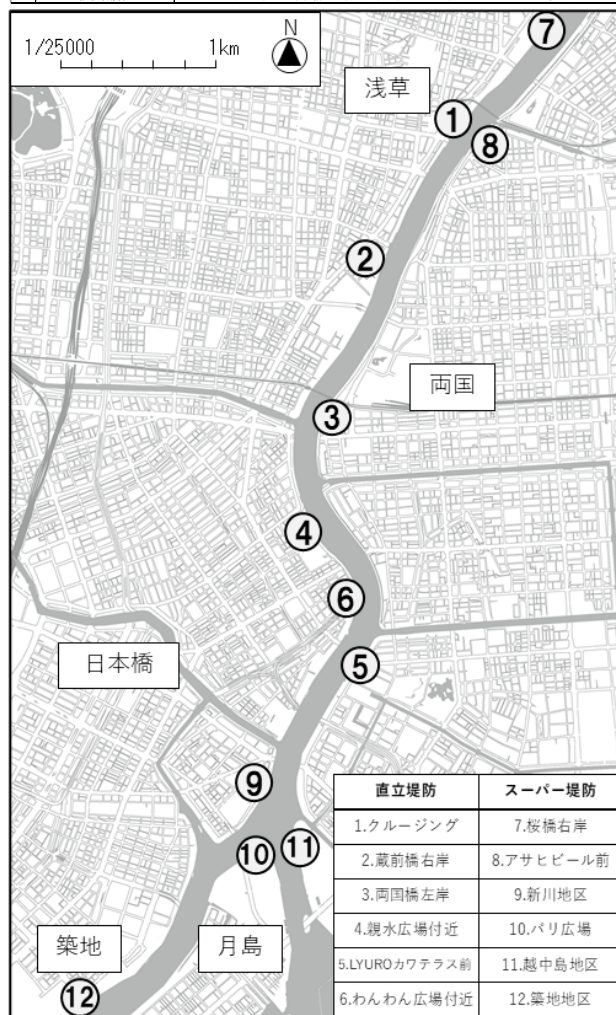


Figure1. Questionnaire distribution location overview

1 : 日大理工・学部・海建 2 : 日大理工・院 (前)・海建 3 : 日大理工・教員・海建

5.0km圏, 10km圏, 10km以上と区分し, 利用者の分布を求めると Figure2 のようになり, また居住地別の分布を求めると Figure3 に示すようになる. これらを見ると直立堤防エリアでは, 1.0km圏から5.0km圏の来訪者が全体の約5割を占め, 隅田川に隣接する地区からの来訪も全体の約8割以上を占めており, 比較的近郊から来訪していることが見てとれる. スーパー堤防エリアにおいても隣接する地区からの来訪が全体の約8割と最も多いが, 直立堤防エリアと比較すると1.0km圏以内の来訪者が特に多く, スーパー堤防整備による身近な水辺への近づきやすさが窺える.

3-2. 隅田川までの来訪方法

Figure4 に隅田川テラス利用者の来訪方法と利用者数を示す. これを見ると, 両堤防エリアとも全体の8割以上を徒歩で来訪する人々が占めている. 一方, スーパー堤防エリアでは, 自転車での来訪は特に少なく, 隅田川テラスの自転車での通行禁止が反映されていることが見てとれ, 歩行者に安心安全な空間が提供されていることが分かる.

3-3. 隅田川テラスでの滞在時間

前項で述べた通り, 隅田川テラスは主として近隣住民に利用されている. そこで, 身近な水辺としての位置付けを把握するため, 徒歩での利用者に対象を絞り, 距離別の滞在時間と来訪時間の関係を求めた結果を Figure5 に示す. これを見ると, 両堤防エリアとも0.5km圏, 1.0km圏の居住者の滞在時間が比較的長く, 居住地の良い空間であることが分かる. また, 0.5km圏においては, 直立堤防エリアよりスーパー堤防エリアの滞在時間が長い. このため身近な水辺としての利用目的に差があり, これらは堤防の整備形態に伴い生じていると推察される.

4. 終わりに

本稿では, 隅田川テラス利用者の利用状況を捉えた. その結果スーパー堤防エリアは, 直立堤防エリアよりも滞在時間において長いと推察されたが, 大きな差は見えず, わずかな差がスーパー堤防エリアにおいて見られた. また, テラスは比較的近郊の居住者に利用されており, 利用しやすいことが分かる. スーパー堤防による親水整備は, 身近な水辺への近づきやすさや滞在時間を向上させていることが分かった.

今後は, 隅田川の水辺環境への意識量を分析していくと同時に, 隅田川の整備方針を検討していく必要がある.

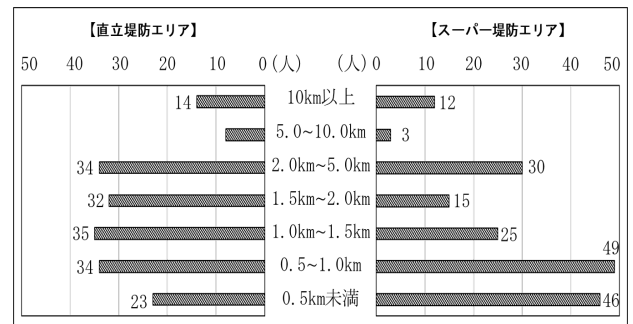


Figure2. Visiting means and number of users by distance

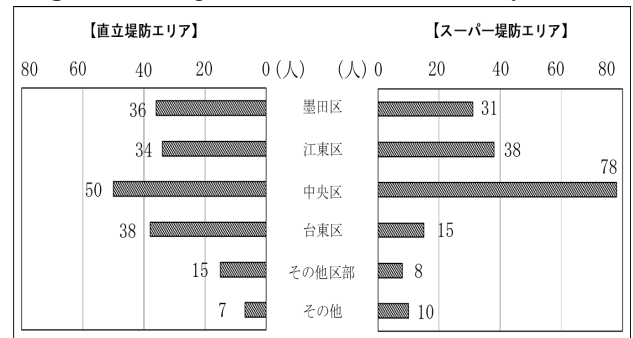


Figure3. Residential area and number of users

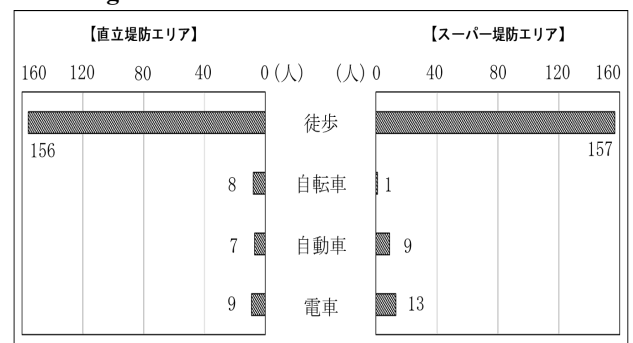


Figure4. Visiting area and number of users

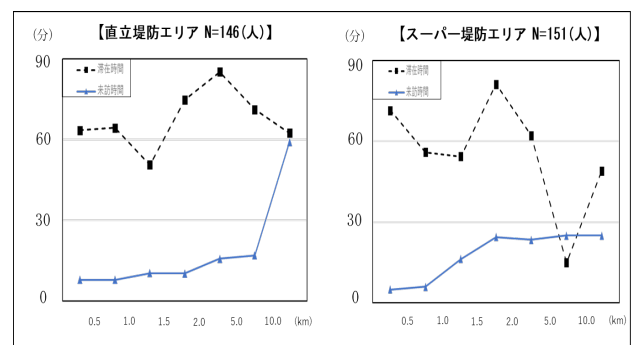


Figure5. Visit time and stay time by residential area

5. 参考文献

- [1] 畔柳昭雄, 渡辺秀俊: 「都市の水辺と人間行動 - 都市生態学視点による親水行動論 -」, 1999年初版発行, 共立出版株式会社出版
- [2] 畔柳昭雄, 渡辺秀俊・長久保貴志: 「都市臨海部の水辺空間における利用者の水辺環境評価に関する研究-都市住民の親水行動特性に関する研究その2-」, 1993年, 日本建築学会計画論文報告書, 第454号